

平成 30 年 6 月 10 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02950

研究課題名(和文)近代フランスにおける社会構想の複数性と「革命」 個人 を起点として

研究課題名(英文)Plurality of thoughts in modern France and the French Revolution, from individual points of view

研究代表者

高橋 暁生 (TAKAHASHI, AKEO)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90453612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：アンシャン・レジーム期、革命期、そして19世紀前後半の時期、様々な社会的立場を生きる「個人」が、それぞれどのような社会構想、国家観を持っていたのか。対象となるのが具体的な個人の思想であったため、研究体制は研究協力者を含め総勢9名での共同研究となり、結果として、「啓蒙—革命—共和国」という近代フランスの理解の再検討という当初の目的を達成することができた。とりわけ、こうした単線的な理解とは別に、いわば「ありえたかもしれない社会」「ありうべき国家」という、社会構想のオルタナティブを提示できたことは、研究史上きわめて重要な成果となった。

研究成果の概要(英文)：Persons who were living in different positions in the old regime, during the French Revolution and in 19th century in France, what kind of thoughts did they have about ideal society or forms of states? Generally, they think that French Revolution and, as its background, the Enlightenment in 18th century are the origin and the base of legitimacy of French Republic even today. But recent social unrest in this country drive to reconsider this understanding: Enlightenment - Revolution - Republic. In choosing 9 persons (clergy, nobles, merchant, administrators, writers, or journalist), from the middle of 18th century to the end of 19th century, we analyzed their discourses: articles of newspapers, speeches in several assemblies, pamphlets, novels, administrative correspondence, private letters and journals. Through this study, we have succeeded in revealing "alternatives" or other possibilities of ideas or plans about a modern France.

研究分野：フランス革命史

キーワード：フランス革命 共和国 啓蒙 社会構想

## 1. 研究開始当初の背景

(1) アンシャン・レジームを扱う研究、革命史研究、そして19世紀史の研究は、必ずしも連携していないが、1789年のフランス革命をその起源とする19世紀後半の第三共和政の意義は、革命と、それに先立つ啓蒙との関連性の中であらためて問う必要があるという認識を持つに至った。

(2) フランス〈共和政〉の歴史的起源は1789年の〈フランス革命〉であり、その前提の一つとして〈啓蒙〉が依然重視されている。他方で、主に1980年代に表面化したいわゆる「移民問題」は、近年のグローバリゼーションやテロの勃発、極右勢力の躍進とも絡んで、現代のフランス社会を動揺させている。こうした中で、あらためてフランス〈共和政〉の国是としての「自由、平等、友愛」あるいは「ライシテ」が議論の遡上にあがっている。こうした状況下において、〈共和政〉の起源としての〈革命〉、その背景の一つとしての〈啓蒙〉、この三者のつながりを基礎とした近代フランスの理解をあらためて検討すべきと考えられた。

(3) 以上のような、〈啓蒙-革命-共和政〉という近代フランスの単線的理解の再検討に際して、これまでとは異なるアプローチを模索していた。近年の文化史研究の進展の中で「個人の語り Personal narrative」の検討が、歴史研究の新たな手法の一つとして注目されている。18世紀から19世紀というおよそ100年に及ぶタイムスパンで、〈啓蒙-革命-共和政〉というメインストリームとは別の、複層的な近代フランスの基層にあった思想的潮流を捉えようとする本研究においては、この「個人の語り」に注目するアプローチも取り入れながら、様々な社会的立場にあった複数の〈個人〉に焦点を合わせる手法が有効であると考えられた。このために、本研究はあえて複数の専門家による共同研究という形が取られることになった。

## 2. 研究の目的

18世紀半ばから後半の啓蒙主義が花開く時期から、1789年に始まるフランス革命の10年間を挟み、19世紀前半の政体の変転と混乱の時期を経て、第三共和政成立に至る世紀後半までの時期を生きた様々な社会層に属する複数の〈個人〉を取り上げ、彼らが、それぞれの時期に抱いた社会構想や国家観を明らかにする。その分析を通じて、近代フランスの基層としての〈啓蒙-革命-共和政〉という単線的理解を再検討することが、本研究の直接の目的であった。〈啓蒙-革命-共和政〉という大きな流れ自体の多面性、またこれと並行するようにして同時代的に存在したはずの複数の、このメインストリームとは異なる、時にはこれと対立する、そして場合によっては一切実現をみなかった社会構想や国家観が、どのように現実としての〈啓蒙-革命-共和政〉に関わり、これを相

対化するのかを明らかにすることが最終的な目的である。

以上の研究の基本的な目的と同時に、研究計画段階においては、アプローチの手段としての〈個人〉への着目という手法がどの程度有効か、その検討という二次的な目的もあった。とりわけ、単なる伝記の集成に終わらずに、上記研究の主要目的のために個々の事例をいかに総合して結論に帰着させることができるかという挑戦でもあった。

日本はもちろん、フランス本国、アメリカやイギリスといった革命史研究の先進国を管見の限り、同種の研究テーマは見当たらず、計画通りに研究が進展すれば、世界に例をみない画期的な研究成果を生み出すことができる。

## 3. 研究の方法

〈啓蒙-革命-共和政〉というメインストリーム自体の複雑さや多面性、あるいはその流れに単純に回収されない「支流」の存在を明らかにしようとする時有効なのは、複数の〈個人〉の中にあるそれぞれの思想的宇宙に焦点を合わせる手法だろう。

研究代表者、研究分担者6名、そして研究協力者2名が結集し、まず第一に、以下の9人の人物を研究対象として選定した。地方の小ブルジョワの家庭に生まれ、主に1750年代から80年代にかけて哲学書、小説を刊行した人気作家であり聖職者でもあったアベ・コワイエ（1708～1782年）、18世紀半ばから後半にかけて大活躍したベストセラー作家ルイ＝アントヌ・カラッシオリ（1719～1803年）、ノルマンディ地方小村出身の法曹家でかのバスティーユ牢獄に22年間投獄されていたプレヴォ・ド・ボーモン（1726～1823年）、ルイ16世治下で王権の美術行政を主導した貴族ダンジヴィレ伯爵（1730～1809年）、『第三身分とは何か』を刊行し、革命の最初期に主導的立場にあった聖職者アベ・シイエス（1748～1836年）、ジャーナリストでかつ国民公会ではモンターニュ派の議員として活躍したカミーユ・デムーラン（1760～1794年）、ノルマンディの首府ルアンに居を置く大商人で、革命期を通して中央、地方で隠然たる政治的影響力を維持したドフォントネ（1743～1806年）、フランス革命を経験しつつも、むしろ革命後19世紀前半に主に思想家、文筆家として活躍したフリーエ（1772～1837年）、そして1889年、すなわちフランス革命100周年を記念したパリ万国博覧会の開催・運営に深く関わったエリート官僚ピカール（1844～1913年）である。まず彼らの生涯を概観し、彼らが生きた環境や時代背景を浮かび上がらせ、場合によっては人間関係にも着目し、彼らの手になる哲学書、小説、新聞記事、政治的パンフレット、行政書簡、演説記録や議会発言などはもちろん、手紙や日記、回想録といったパーソナルな史料も駆使しながら、それぞれの思想を詳細に分

析し、彼らの社会構想や国家観を明らかにすることを試みた。彼らはしばしば、直接的にはその社会構想や国家観を語ることはない。たとえば、美術行政官のプライヴェート・コレクションのリスト、一地方商人の妻への手紙、聖職者の書いた小説。こうした史料の中に、彼らの社会観や国家観を間接的に読み取ることにも挑戦した。

以上の作業から生まれた研究成果を、ただ集成しただけではない。複数回の共同研究会を開催し、それぞれの研究成果を突き合わせ、9人の思想分析から明らかになる、18世紀後半から19世紀終わりに至る時期の複数の思想潮流を総合することを試みた。〈啓蒙-革命-共和政〉という単線的な近代フランス理解を相対化するという本研究の目的のためには、不可欠な研究プロセスということになる。

#### 4. 研究成果

主に革命前に活躍した人々（アベ・コワイエ、カラッシオリ、ル・プレヴォ、ダンジヴィレ伯爵）の社会構想の中に革命の芽を捉えることができた。例えばコワイエにみられる貴族批判や民衆観、祖国愛の強調は、革命とその後の近代フランスの創造とつながると言えよう。一方で、革命とその後の共和政への道筋とは接合しない思想的立場も明らかになった。例えばキリスト教護教論者カラッシオリの主張は興味深い。彼はフランスの文明を基本的には称揚しつつも、それによる人間性の腐敗を防ぐのはキリスト教の教えであると確信している。また「単一の祖国」を望みながら、それをまとめ上げるのはやはりキリスト教ということになる。何よりもカラッシオリは「新思想」、すなわち啓蒙を明確に批判している。最初期の革命を「第三身分の尊厳の回復」であるとして支持していることから、フランス革命と根源的に対立する社会観、国家観を持っていたとは言えないが、明らかに〈啓蒙-革命-共和政〉というメインストリームとは異なる思想的立場をとった一人と言えよう。

また革命期のただ中を生きただけの人びとについては、革命の激動の中で、その政治的、思想的立場を時には大きく変転させていることを明らかにした。これは本研究の重要な成果の一つである。とりわけ顕著なのはジャーナリストのカミーユ・デムーランであろう。最初に「共和主義」をとらえた人物ともされるデムーランの思想は、特に革命の進行に際しての民衆たちの行動や政治的な急進化を眼前にして、それまで明確には確認されなかった「出版の自由」と民衆の教化、そして共和政とを結びつける議論へと深化する。革命初期に活躍したシエス、地方商人ドフォントネについても思想的立場の変化が明らかにされ、革命の方向性が日々模索される中で、共和政に関わる思想的態度も変化し続けていたことが確認された。

そして、第一帝政から復古王政に至る時期、また第三共和政期に、革命の遺産がどのように受け取られ、再解釈され、何を新たに生み出すのかを、主に19世紀を生きた人物を取り上げ、分析した。たとえば19世紀末の万国博覧会を主導した高級官僚ピカールについては、彼が精魂を傾けて執筆した博覧会に関する大部の報告書が主に分析対象となった。ピカールは、いわば革命の暴力や精神的恐慌の側面を除去する「解毒」プロセスを通して、次代に向けた理想的な社会を構想し、また第三共和政という生まれたばかりで依然幼弱な体制を正当化し、強化するための、フランス共和国の集合記憶の構築へつなげようとしたことが明らかになった。

本研究で取り上げた各〈個人〉の社会構想は、いわば「ありべき国家」「ありえたかもしれない社会」といった「可能性の束」である。革命前夜、彼らは未来の「可能性としての革命」を語っており、それは現実起きた革命の10年の枠組みにすべて回収されるものではなかった。革命期には、それぞれがそれぞれの社会的立場も反映した社会構想や国家観を表明してはいるものの、それらの思想を、現実が瞬く間に否定、ないし乗り越えてしまう。その激変に合わせて、あるいは激変する現実をその都度解釈し直すようにして、彼らの思想的立場は変化し続けた。19世紀には革命を振り返って、革命を否定したり、あるいは少なくとも表面上はこれを賞賛しつつも、やはり現実起きたそれとは必ずしも一致しない「可能性としての革命」を創造したと言える。

〈個人〉を起点として「可能性としての革命」の存在を明らかにし、近代フランスの複層的な理解を提示する共同研究でしかなしえない以上の研究とその成果は、「研究の目的」でも触れたように、世界に例をみない。本研究の以上のような達成は、国際的にも重要な研究史上の貢献であると言えるだろう。

なお、本研究の一部はすでに公表されつつあるが、その総合的な研究成果については、日本学術振興会科学研究費・研究成果公開促進費（学術図書）からの支援をお願いして、出版、公開し、広く共有する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

①福島知己、「R. A. Sayce「1530年-1800年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」の検討（4）」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』、査読無、38号、2018年、60-83頁

②田中佳「王室建造物局総監ダンジヴィレ伯爵の私的注文絵画」、

『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』、査読無、Vol. 25、2017年、68-85頁

③ Noriko TERAMOTO, "Struggle of a non European country in the World Fairs: the case of Japan", *On World Expos and East Asia*, *Journal of Environmental Studies*, 査読無, no. 60, 2017年, pp.25-33

④ 増田都希, 「家内統治書」としての18世紀後半フランスの「作法書」—テーマ・著者群・読者像」、『西洋史学』、査読有、261巻、2017年、60-72頁

⑤ 松本礼子, 「18世紀後半における絶対王政の秩序と身分をめぐる認識—【悪しき言説】へのパリのポリスの対応から」、『一橋社会科学』、査読有、8巻、2016年

⑥ 増田都希, 「ミラボー侯爵『人間の友—人口論』(1756)における社交性 sociabilité の概念—作法論と政治経済論の交差点としての自然法」、『日仏歴史学会会報』、査読有、30号、2015年

[学会発表] (計7件)

① 増田都希, 「流行三流作家ルイ＝アントワーン・カラッショリ」、関西フランス史研究会 (京都大学)、2018年1月

② 増田都希, 「18世紀後半フランスにおける“中間の人びと”と文明化—『作法書』の分析より」、日本18世紀学会、2017年

③ 松本礼子, 「18世紀パリにおける街区の把握と可視化—捜査官の報告書の分析から」、社会経済史学会、2017年

④ 福島知己, 「『産業の新世界』の構想と成立—その序文の一草稿を素材にして」、シャルル・フーリエ研究集会 (国際学会)、2018年3月

⑤ 増田都希, 「18世紀後半フランスにおける“中間の人びと”と文明—『作法書』の分析より」、18世紀学会、2016年

⑥ 平正人, 「ベルンシュタイン文庫とカミーユ・デムーラン」、ベルンシュタイン文庫研究会、2016年

⑦ 平正人, 「フランス革命期の新聞の『読み方』—理想と現実の狭間で揺れうごく新聞記者カミーユ・デムーラン—」、メディア史研究会、2015年

[図書] (計3件)

① 高橋暁生他、SUP 上智大学出版、『グローバル・ヒストリーズ』、2018年2月、49~75頁

② 松本礼子他、晃光書房、『地域と歴史学—その担い手と実践』、2017年、133~157頁

③ 寺本敬子他、思文閣出版、『万国博覧会と人間の歴史』、2015年、73~102頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 暁生 (TAKAHASHI, Akeo)  
上智大学・外国語学部・准教授  
研究者番号: 90453612

### (2) 研究分担者

福島 知己 (FUKUSHIMA, Tomomi)

一橋大学・社会科学古典資料センター・助手

研究者番号: 30377064

田中 佳 (TANAKA, Kei)

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部  
社会総合科学域・准教授

研究者番号: 70586312

寺本 敬子 (TERAMOTO, Noriko)

跡見学園女子大学・文学部・講師

研究者番号: 80636879

松本 礼子 (MATSUMOTO, Reiko)

一橋大学・大学院経済学研究科・特任講師

研究者番号: 60732328

平 正人 (TAIRA, Masato)

文教大学・教育学部・准教授

研究者番号: 90594002

増田 都希 (MASUDA, Toki)

成蹊大学・その他部局等・研究員

研究者番号: 50760633

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号:

### (4) 研究協力者

山崎 耕一 (YAMAZAKI, Koichi)

森村 敏己 (MORIMURA, Toshimi)